



# 家庭教育支援協会

## ニュースレター

創刊号

### ～家庭教育支援協会について～

家庭教育支援協会 理事長 和倉慶子



家庭教育支援協会は平成22年12月18日に設立しました。本日まで家庭教育アドバイザーを中心に家庭教育に関心のある人々や団体との連携の下に、家庭教育の発展や振興に貢献することを目的として事業計画をたて、事業内容や活動内容などを検討し事業実施してまいりました。

皆様のご協力で沢山の事業計画を実施することができました。心からお礼を申し上げます。

大震災、いまだ続く原子力発電所問題などで、ますます社会情勢は大変なものとなっています。また、食に関する問題では原子力発電所事故から素材そのものへの不安もあります。家族がバラバラで生活しなければならない状況の家族もあります。一家団欒の食卓を囲む食事風景はますます少なくなってしまうまいりました。「家族あれども家庭なし」をなくしましょう。

さて、「家庭教育とは」教育基本法の改正（平成18年12月）で家庭教育に関する独立規定が新設されました。また平成23年度家庭教育支援関連施策には「学校・家庭・地域の連携協力推進事業」の中に専門的な職業系人材の育成推進事業があります。行政も家庭教育を支援する人材の育成が必要であるとも述べており、私たち家庭教育アドバイザーを求めていることも事実です。

私は今年5月から母の介護があり横浜市から北海道小樽市に移住しました。小樽市の中でも小さな町で、朝犬の散歩をしていますと知らない方から「おはようございます」「涼しくなりましたね」などと声をかけられます。地域に何方が住んでいるかを知っていました。「地域の力が頼り」と大震災で改めて言われています。この地域には昔の生活が残っており、とても嬉しく思いますが、家庭における子どもへの教育は変化しつつあり三世代で生活している家族は少なく、ひとり暮らしの老人宅が多く家族の変化を感じています。しかし、地域には昔ながらの挨拶（声かけ）から始まり子どもたちや老人を見守る体制ができています。

では、「家庭教育支援とは」、家庭の子どもの教育支援であり、それは親の教育です。子どもは親を見て真似て育ちます。親の家庭に関わる全ての支援を考え社会の中心である家庭を教育することで地域がまとまり良い社会が築かれます。

私たちは家庭教育に関する調査や研究、講演会の開催や社会活動を行う会のサポートなどを各地域の会員の皆様と一緒にすることで社会に貢献できると思います。

家庭教育支援協会会報の第一回刊行の発行にあたり、ますますの家庭教育の向上・普及に努めたく思います。皆様のご協力をお待ちしております。

## ～家庭教育支援協会と今後の家庭教育支援について～

中田 雅敏

(家庭教育支援協会 顧問・八洲学園大学教授)



初代学長の高橋進先生が定められた、八洲学園大学の建学の精神には、「教育の原点は家庭であることに基づいた、家庭教育、学校教育、社会教育の融合を図り、もって生涯学習社会を実現すると同時に、すべての人に高等教育の機会が得られることを期す」と記され、その目標達成をもって設置された大学です。

平成十二年十二月の内閣総理大臣の諮問機関であった教育改革国民会議の報告には、「教育を変える十七の提案」があり、その筆頭に「教育の原点は家庭であることをすべての国民が自覚すべきである」と記されている。しかし、家庭における教育の重要性を認めながらも、具体的に家庭ではいかなる教育がなされるべきか、またそのための教育方法はどうかということについては、それまで研究されることがなかった。

しかし、それ以後も家庭に起因する事件や子供の教育、子育ての悩み、育児放棄、児童の虐待死が相次ぎ、日本の家庭は崩壊の状態にあると指摘されるようになっていた。そこで、政府は教育の根幹である「教育基本法」を六十年ぶりに改正し、それまでにはなかった「家庭教育」の教育分野を立項し、条文も整えた。本学はこの法改正を受けて、家庭においてどのような教育が営まれるべきかを研究し、その成果をすべての家庭に教授することを使命とする、生涯学習学部家庭教育課程を設置したのであった。

今やこの課程を卒業し、家庭の在るべき姿を目指して、家庭教育を支援することができる方法論と理念とを学んだ卒業生が、日夜「家庭の教育を通して日本における有為な人材を育成し、社会と家庭をよりよくすること」を目標にして活動をしている。それらの卒業生は、家庭教育、社会教育、学校教育の三分野を統合的に学習した、学習支援者でもある。

平成十六年に八洲学園大学が開学した時、八洲学園の和田公人理事長は次のように八洲学園の教育理念を述べている。

「教育の原点は家庭であり、教育の中心が学校から家庭へと大きく流れが変わりつつあります。しかし、家庭での教育を、自信をもって実践できる方は少なく、気軽に相談できて、自分自身が勉強できる教育機関の設立が待たれていました。さらに、家庭教育について専門的に研究している研究機関や専門家が極めて少ないという現実がありました。そこで、家庭教育を確立するとともに、一人でも多くの親が自信をもって子育てができることを目指して、八洲学園大学を設立いたしました。よりよい家庭を築きたいと考える方々がともに学び、ともに研鑽する場として、八洲学園大学が期待を担って参ります」と。

こうした建学の精神と、理事長の教育理念を踏まえて、本大学で家庭教育について研鑽と研究を傾けて卒業した方々は、日本家庭教育学会より「家庭教育アドバイザー」、または「家庭教育師」として認定され、その資格と学問の成果と実践を携えて、全国各地で活躍し、各都道府県および各自治体の施策と連動して、子育て支援、学校相談員、家庭問題支援に取り組んでいました。

ところが最初は、こうした家庭教育支援に取り組んでいる方々の連帯と研修、更には交流会などを開催して更なる研究と互いの研究と、支援の方法とを磨くためには、個人ではどうしても限界があるとの声が高まっていました。また八洲学園大学で家庭教育についての理念と方法論とを学んだ学生が、続々と卒業する時に及び、これら「家庭教育アドバイザー」と「家庭教育師」を統合し、よりよい支援活動に取り組めるような組織がほしいという声が高まり、ここに同志の方々が集まって「家庭教育支援協会」を設立するに到ったのでした。

私たちは、この家庭教育支援協会の設立理念を踏まえ、規約に則り、誠実に支援活動に励みたいと考えているのである。まずは自分の家庭を齊え、家庭に起因する問題に悩んでいる人々の支援に携わり、いわば誰もが幸福感を感じ取れる家庭や社会に少しでも役に立てることができるようになればと思っている次第です。

大きく言えば、「世のため、人のため」、小さくは自分の家庭をそれぞれの人々が楽しく幸せにする手助けになれる存在になりたいと考え、家庭教育支援協会の設立理念としたいと願っています。また支援協会の会員は、それぞれの人生の中から学んだ「人のために役立つこと」が、たとえ小さなことであっても、自分を生かし、人の役に立つことであると信じた道を実践していこうと誓った人達の集まりです。それ故、日頃も怠ることなく研究に励んでゆくことを信念としています。設立の理念を忘れることなく、一人でも困っている人があれば、手助けをし、家庭教育の普及のための実践活動を展開してゆきたいと念じている次第であります。

# ～本協会の発足までの歩みとこれからの活動～

嚴 錫仁

(家庭教育支援協会 副理事長・八洲学園大学准教授)



家庭教育支援協会が産声を挙げてから早半年が経ちました。この間、協会では、対外的に講演会や家庭教育支援講座などの事業を展開しながら、内部的には組織の整備、会員募集、外部団体との連携、新しい事業の模索などの基礎作りの作業を進めて参りました。まだ試行錯誤の連続で、反省点も多いですが、これからの活動のための最初の一步は踏み出すことができたと思っております。しかし、ここまでくるのも容易なことではありませんでした。ここで、協会発足に至るまでの歩みを振り返りながら、これからの協会の活動について考えてみたいと思います。

家庭教育アドバイザー・教育師を中心とする一つの団体設立の話が具体的に持ち上がったのは、2009年の春からでした。2008年度から八洲学園大学の卒業生が輩出され始め、2009年春の当時まで家庭教育アドバイザー・教育師の資格を持った卒業生も40名ほどになっていました。その中で何人かの家庭教育アドバイザー達から、せっかく家庭教育の専門知識を身につけて卒業をし、ハードルの高い家庭教育アドバイザーの資格を取ったのに、その知識や資格を活用できないのはもったいない、とはいえ個人で活動するにも限界がある、なにかよい方法はないのか、という意見が教員のほうに寄せられました。当時、大学の家庭教育課程の教員達も、家庭教育の卒業生のための支援策を模索しているところでしたので、自然に教員と卒業生との間に話し合いの場が設けられることになりました。現在、協会の中心メンバーを構成している和倉慶子理事長、城条洋子理事、坂本有希子理事、八坂卓史理事、そして中田雅敏教授をはじめとした家庭教育専攻の何人かの教員が会合の参加者となり、定例会という名称で月1回のペースで会議を重ねていきました。そして、そうした会合の傍らで何回か横浜市の青少年局や教育委員会等を訪ね、行政側の協力や助言を求めたところ、自治会で行う関連事業に参加していくためには法人格の団体が必要だというアドバイスをもらったことも一つの契機となり、団体設立の構想が本格的に始まりました。その時、幅広く皆さんの意見を収斂し意見交換のために役に立ったものが、すでに当時八坂さんの協力を得て運営していた「アドバイザーML」でした。

しかし、団体設立の構想は思う通りには進まず、2009年の年末になっても足踏みの状態が続きました。当初構想していた団体はNPO法人のような法人格のものでしたので、重く感じられたのでしょうか。また家庭教育アドバイザー・教育師の資格を有しているものの、自分達の能力がどこまで通用できるのかについても不安があったのでしょうか。そこで、まずは社会の家庭教育における自分達の活動の可能性を点検し、講師としての経験を積む機会を設けてみることはどうかという意見が出され、その方向への検討・準備が始まりました。その努力の実りが本協会の初年度の基本事業の母胎となる、「ミラクルアドバイスⅠ・Ⅱ」（八洲学園大学の2010年度エクステンションに参加）と、「かながわコミュニティカレッジ平成22年度家庭教育支援活動入門講座」の開催でした。規模面においてはすこし期待に及ばなかったかもしれませんが、〈やっていける！〉という自信は得ることができました。その自信が2010年12月18日、「家庭教育支援協会」の発足に繋がり、今の活動の下支えになっているわけです。以下、2010年度からの活動を表であらわすと、次のようになります。

## 〈2010年度からの2011年8月までの活動内容〉

事業名	実施日・場所	講師・内容	備考
家庭教育支援講座「子育ての親へのミラクルアドバイスⅠ」	2010年4月19日～5月24日、毎週月曜日 10:00～11:50、八洲学園大学	中田雅敏「伝統文化と家庭の暮らし」	八洲学園大学のエクステンションに参加。 各講座50分講義
		青山利江「親は子どもと向き合っていますか？」	
		城条洋子「子どもたちの自己肯定感を高めるためのアドバイス」	
		八木由紀「コミュニケーションは取れていますか？ー子供のSOSに気づかない親たち」	
		和倉慶子「親が子に教える「生き抜く力」」	
		八坂卓史「視点を変えて楽しい子育てを！」	
		嚴 錫仁「よき親子関係を維持していくための先人たちの知恵」	
かながわコミュニティカレッジ「平成22」	2010年6月7日～7月12日、毎週月曜日	中田雅敏「伝統文化と家庭の暮らし」	各講座90分講義・ディスカッション
		青山利江「親は子どもと向き合っていますか？」	

年度家庭教育支援活動入門講座	10:30~12:00 神奈川県民センター	和倉 慶子「親が子に教える「生き抜く力」		
		八坂卓史「視点を変えて楽しい子育てを！」		
		嚴 錫仁「親子関係を考える」		
		坂本 有希子「「話を聞く」スキルを覚えよう」		
家庭教育支援講座「子育ての親へのミラクルアドバイスⅡ」	2010年10月18日 ~10月25日 毎週月曜日 10:00~11:50、 八洲学園大学	鈴木啓之「＜母子健康手帳＞を就学前まで使い尽くそう」		八洲学園大学のエクステンションに参加。 各講座 50分講義
		丸山美輪子「〔家庭における＜食育＞の重要性〕		
		坂本有希子「家庭力UP!“子ども達の‘生きる力’に磨きをかけよう”」		
		江田英里香「妊娠出産から始まる家庭教育」		
家庭を幸せにする講演・ワークショップⅠ	2011年4月23日 13:30~15:00 八洲学園大学	講演	渡邊達生「子ども（小学生）のやる気を引き出す心の教育」	
		ワークショップ	和倉慶子「子供の友人関係・放課後活動」	
			和田みゆき「受験と親の役割」	
			丸山美輪子「家族の食卓」	
家庭教育支援講座－家庭教育支援者のスキルアップのためのミラクルアドバイス	2010年6月2日 ~7月21日 毎週木曜日 10:30~12:00 神奈川県民センター	中田雅敏「本講座のプロローグ－家庭問題・家庭教育の捉え方」		各講座 90分講義・ ディスカッション
		坂本有希子「私たちにできること－震災から3カ月」		
		八木由紀「隣りあわせの虐待－よいしつけとは何か」		
		堀内祐子「発達障害の子とハッピーに暮らすヒント」		
		木村孝子「思春期のドロップアウト」		
		城条洋子「民生委員からみた家庭の悩みの変遷」		
		丸山美輪子「放課後の子ども支援活動の実態と展望」		
		和田みゆき「受験期における子どものメンタルケア」		

ご覧の通り、講演の内容は家庭教育の興味深い様々な分野に及んでいます。一つ一つ各会員が専門分野を開拓していきながら、単に上からの目線ではなく、家庭教育の実践者としての立場から家庭の問題を解決し、また家族の幸せを守り増進させる役割を果たしていきたいと思えます。

さて、本協会は八洲学園大学の卒業生だけのものではありません。本協会の規約にも明示されているように、家庭教育に関心のある方、それに基づいて明るくて幸せな家庭を作っていくことに同調する方であれば、誰でも同志として歓迎しています。また現に、そうした大勢の方が参加されています。現時点において八洲学園大学の家庭教育（課程・専攻の教育課程）そのものが2年後にはなくなってしまうという状態を踏まえて、より広い視野で家庭教育や本協会のあり方を考える必要もあるし、それに伴う事業展開も考慮しなければなりません。皆様の力を合わせて大きく飛躍できるように頑張っていきたいと思えます。

## ～活動報告～

家庭教育支援協会 理事 城条洋子



家庭教育アドバイザーとしての活動報告となりますと、私の仕事は親御さんがお仕事をされている方への放課後サポートとして、学童保育の指導員を続けています。仕事を始めたころの親御さんは共働きをしながらも、子どもとの関わりを大事にして一生懸命に子どもに目を向けていた親御さんが多かったように思います。現在も大事には考えられていると思われませんが、最近入所してくる児童は、ひとり親家庭が多く、親自身が自分のこと、家事のことに追われ子どものことにゆっくりかかわれない状態にあるために、問題行動が起こっても対処せずに放置してしまい、重度になって初めてことの大きさを把握して相談されてきます。そこでアドバイザーとして助言をしています。

そういう親であっても、親の生活状態を認めてあげて、そこから子どもに対してどうしてあげたらよいか、また親として私たちに何をしてほしいかをゆっくり時間をかけて聞いてあげています。そして、信頼関係が生まれてくることを期待して、相談ののってあげることに心掛けています。問題については大小ありますが、子どもたちが毎日楽しい家庭に戻れるようにアドバイスができればと考えています。

また、私は地域で民生委員児童委員をしています。そこでは、学校に行かれない不登校児を抱えた親御さんたちへの助言・児童虐待にかかわる家庭に対して、家庭教育アドバイザーの立場で、助言をし、また関係機関と連携して子どもたちが健康な身体で生活でき、明るい雰囲気形成して笑顔がある家庭の中で、ユーモアにあふれる家族であってほしいために、日々努力しています。

家庭教育支援協会の自主事業の企画に参加させていただき、講演も「自己肯定感を高めるため」「民生委員児童委員から見た家庭の悩みの変遷」のテーマのもとで、2回させていただき、ワークショップのアドバイザーとしても参加しました。

これからも家庭教育支援協会の活動が皆様のご協力で順調に動いて行かれるように、努力していきたいと思っています。

## 家庭教育支援協会 地方への展開 ～静岡支部設立へ向けて～

家庭教育支援協会 理事 八木由紀



私が、家庭教育の重要性を認知するようになったのは、娘が4歳の時です。恥を晒すと、私は、娘が生後1歳にも満たない時期に、彼女に向かって、言葉の虐待をしていました。

「ああ、この手を離せば、この子はいなくなる」ぼーっとそんなことを考えながらベランダで、娘をゆーらゆーらと抱いていました。気がつくと、娘を抱いた両腕をベランダの外側へ出し、落とす寸前の状態で、遥か下の地面を見ていました。じっと私の目をみる娘の、痛いほどの視線に気づき、ゆっくりとベランダから離れました。生後4ヶ月のことでした。

「もう、いい加減にしてよ、いつまで泣くつもり？」そう言って、娘に向かって枕を投げつけました。それでも泣き止まない彼女に、毛布と布団を被せ、私は自分の耳を塞ぎました。夜勤で夫がいない夜は、いつものこと。

ある時、娘を抱き上げた後、布団へ叩きつけました。火がついたように泣き叫び、怯えた目つきで、私を見つめる娘。私のイライラは頂点に達し、また手を上げようとした時、身構えた娘を見てやめました。彼女は、まだ生後11ヶ月でした。

「やかましいって言ってるの、あっちへ行ってよ」

「どうしてここで吐くのよ、わざとでしょ。あたしをそんなに困らせたい？」

「ちょっといい加減にしてよ。もう、ミルクあげないから。そうすれば、吐かずに済むもんね」

「何か用？しつこくつきまとわないでよ。今、ミルク飲んだばかりでしょ、ほかに何か欲しいわけ？洗濯してるんだからあっちへ行ってってば。もう、煩わしい。」

こんな言葉を毎日浴びせられた娘は、それでも一人しかいない母親の私を頼るしかありません。どんな気持ちだったでしょう。1歳にも満たない純粋な心に、消えることのない深く大きな傷をつけてしまったと思います。乳児の仕事は泣く、吐く、ぐずることです。頭ではわかっている、実際は想像以上でした。どうしたら泣き止んでくれるのか、どうしたら母乳やミルクを吐かずに飲んでくれるのか・・・。

親、夫、医者、先輩ママたち、誰に聞いても「もっと大らかに構えて、ゆったり楽しく気長に育てなきゃ。子どもには、母親の気持ちが敏感に伝わるものなの。親子でカリカリしてたら、余計にぐずるし、悪循環」と言われるばかり。

ああ、そんなこと言われなくたって分かってる、それができないから聞いてるんじゃないの、とイライラ。

新人類と言われる世代で、独身時代を謳歌し、地元の優良企業でテレビ制作の仕事に就き、結婚退職後は、フリーになりました。子どもを授かったのですが、フリーとしてのキャリアを中断することで、社会から置いていかれてしまったような寂しさ、仕事への未練、バリバリと仕事を続ける同僚達への羨望がありました。そしていつも、負け組みで惨めだという気持ちばかり。当時の私は、いい妻、いい母親、いい女性を演じるのに一生懸命。周りからは、明るくて、ハキハキした感じのいい人、いつも笑顔を絶やさない優しい母親、オンとオフを使い分けられるキャリアウーマンの賢い女性、そんなふうに見られたがっていました。実際、私をそのように見ていた人も多かったと思います。しかし、いつの間にか、自分の感情をコントロールできなくなってしまうほどのストレスを溜め、娘にぶつけていたのです。世間の目に映る私は、大切な娘の犠牲の上に成り立った虚飾の姿だったのです。

二人目も生まれ、娘が幼稚園の年中組になったある日、彼女から突然、笑顔が消えました。園長夫人に呼び止められ、話をされました。娘が真剣に、「先生、ママはね、私のことを真っ黒いゴミ袋に入れて、ゴミの日に捨てたんだよ」と言っていたというのです。

あれは、娘がもうすぐ1歳になる頃でした。あまりにも泣きじゃくるので、いつものように暴言を吐き、最後に「そういう悪い子は、ゴミ袋に入れて捨てちゃうから」と睨みつけたのです。実際には、捨てるなどしませんでした。1歳にも満たないときの出来事を4歳になった娘が覚えている！私は息ができなくなるほど胸がつまり、猛省し、直接娘とよくよく話をすることで、彼女の気持ちを吐露させ、ただただ謝るばかり。二人とも涙でくしゃくしゃになりましたが、娘はわかってくれたようで、以後、笑顔は復活しましたが、完全に私が安心できたのは、それから5年後の小学4年生の時です。心の傷は、もうないと思いますが、傷跡は残っているでしょう。今は、笑顔で毎日高校生活を満喫しています。

私は、公の機関はもちろん、母親サポートサービスがあることも知っていましたが、恥を晒すようで、どうしても相談に行けませんでした。身内にも娘に対する虐待を知られたくありませんでした。誰か、第三者に共感して欲しかったのです。幸い、私には幼稚園の園長夫人がいて下さり、救われました。

こうした体験から、私は、子を持つ保護者を親身に支援する体制が必要だと思うようになりました。

また、保護者自身が、子育てを楽しめるよう「子育てスキル」をつけられる「学びの場」も必要だと感じました。

まずは、親として子供を育てるとはどういうことか、子どもとの接し方は、自分が親からされてきたことしか知りませんが、どうすることが子どもにとってプラスなのか、など学び始めました。しかしこうした学びは、やはり、中央首都圏の方が質も量も豊富で、地方に住む私には、費用対効果からみて、非常に大変でした。子育ては、全国どこでも同じです。全てが当てはまるわけではありませんが、良質のサポート体制が整えられるのは、やはりまだまだ地方よりも中央です。その中央に集中しているものを学び、地方へ循環させることが、私の使命だと今は感じています。

私の住む静岡市にも、子育て支援政策があります。しかし、私のように、そこへ足を踏み出せない保護者がいるのも事実です。全ての保護者へのきめ細やかな支援手法の開発が今後の課題だと思いますが、家庭教育支援協会は、まさに、それをするところです。そして課題を解決できるのは、中央ではなくそれぞれの地域にあった解決策です。

まずは、猛省した私が、地元で支部を設立し、悩める保護者の皆様と共感しながら、楽しめる子育てができる支援体制を整えたい、と思っています。

## ～現在の活動について～

家庭教育支援協会 丸山 美輪子



八洲学園大学の家庭教育課程を卒業し、家庭教育アドバイザーの資格をいただいてから3年目を迎えました。アドバイザーとしては大変未熟ではありますが、現在は異なる2つの分野で活動をさせていただいております。今回はその活動内容についてご紹介していきます。

1つは食育です。八洲学園大学卒業後は、もともと興味があった「食」の世界へ入るべく、専門の学校に通い、「フードコーディネーター」と「食育アドバイザー」の資格を取得しました。食育とは、さまざまな経験を通じて「食」に関する知識と、「食」を選択する力を取得し、健全な食生活を実践できる人間を育てることでありますが、その範囲は栄養面、生活面、安全面、文化面、環境面など、多面にわたっています。こうした中で、私が食育推進に最も必要と考えたのが「家庭における食育」の重要性で

す。家庭教育は、学校教育、社会教育の土台となるものですが、食育もまた、知育、徳育、体育の基礎になるものとして位置付けられています。つまり家庭教育と食育はどちらも教育の核であり、なおかつそれらは家庭での食卓を豊かにすることによって、より高められると感じたのです。昨年は、このことをテーマに現代の家庭の食事情も交えながら、かながわコミュニティカレッジ連携講座や日韓家庭教育シンポジウムなどで発表やワークショップをさせていただきました。誰にとっても身近である「食」を通して、少しでもわかりやすく家庭教育、食育の大切さを知ってもらえればと考えています。

もう1つは放課後子ども支援事業です。小学校の余裕教室を活用して、子どもたちに安全な遊び場を提供したり、異学年の子どもや地域の人々との交流を目的とする放課後子ども支援事業が全国に拡大しているのをご存知ですか。私は4年前から東京都武蔵野市の放課後子ども支援事業スタッフとして小学生と関わっていますが、地域で子どもを見守ることの必要性を改めて痛感する今日この頃です。また、このような場所は、単に遊び場としての機能だけでなく、子どもたちにとって学校や家庭以外のもう1つの居場所になってもらえればと思っています。というのも、ある子が「学校でも家でもいい子にしているのに、どうしてここ（放課後子ども支援事業の教室）でもいい子にしていなきゃいけないの?」といった言葉に大きな衝撃を受けたからです。子どもたちの中には受験のストレスや友達と仲良く遊べない、など様々な事情を抱えている子がいます。そうした子たちにとってこの場所が「本当の自分を出せる場」あるいは「心の拠り所」となってほしいのです。親でも教師でもありませんが、子どもたちの明るい将来を願う気持ちは一緒です。家庭教育で学んだことを活かして、時に優しく、時に厳しく子どもたちの成長を見守っていきたくと思います。

## ～これからの活動目標～

家庭教育支援協会 理事 青山 利江



家庭教育が、必要とされていることが最近特に思います。新聞などで報じられていることですが、幼児虐待が去年より今年の方が多くなってきているとゆうことです。10代～20代のカップルでも虐待や束縛、ドメスティックバイオレンスが年々多くなって来ていることは、社会が何かおかしいことが起こっている事がわかります。メデイヤなどが原因とも思われますが、そればかりでは無いようだと思います。

「内閣府 男女共同参画局」の資料より

「子どもに与える影響を目撃したことによって、子どもに様々な心身の症状が表れることもあります。また、暴力を目撃しながら育った子どもは、自分が育った家庭での人間関係のパターンから、感情表現や問題解決の手段として暴力を用いることを学習することもあります。」

「ドメスティック・バイオレンスについての概要を説明」

「暴力の特徴 なぜ逃げる事が出来ないのか (1)恐怖感 被害者は、「逃げたら殺されるかもしれない」という強い恐怖から、家を出る決心がつかないこともあります。(2)無力感 被害者は暴力を振るわれ続けることにより、「自分は夫から離れることができない」「助けてくれる人は誰もいない」といった無気力状態に陥ることもあります。(3)複雑な心理 「暴力を振るうのは私のことを愛しているからだ」「いつか変わってくれるのではないか」との思いから、被害者であることを自覚することが困難になっていることもあります。(4)経済的問題 夫の収入がなければ生活することが困難な場合は、今後の生活を考え逃げる事ができないこともあります。(5)子どもの問題 子どもがいる場合は、子どもの安全や就学の問題などが気になり、逃げることに踏み切れないこともあります。(6)失うもの 夫から逃げる場合、仕事を辞めなければならなかったり、これまで築いた地域社会での人間関係など失うものが大きいこともあります。

被害者に与える影響 被害者は暴力により、ケガなどの身体的な影響を受けるにとどまらず、PTSD (post-traumatic stress disorder : 外傷後ストレス障害) に陥るなど、精神的な影響を受けることもあります。

【PTSDとは】 地震や台風といった自然災害、航空機事故や鉄道事故といった人為災害、強姦、強盗、誘拐監禁などの犯罪被害等の後に生じる特徴的な精神障害ですが、配偶者からの繰り返される暴力被害の後にも発症することがあります。PTSDの症状としては、自分が意図しないのにある出来事が繰り返し思い出され、そのときに感じた苦痛などの気持ちがよみがえったり、験を思い出すような状況や場面を、意識的または無意識的に避け続けたり、あらゆる物音や刺激に対して過敏に反応し、不眠やイライラが続いたりすることなどがあります。」

これは内閣府男女共同参画局の資料から抜粋したのですが、現在の社会状況から見ても起こりやすい状況にあることがわかります。

子供達や子供を育てている親を守り支えてあげることが必要になっています。 私は、家庭教育師・家庭教育アドバ

イザーとして地域・社会に役立つように努力して行きます。

## ～ 編集後記 ～

家庭教育支援協会 理事 坂本有希子

「家庭教育支援協会」が発足し、早いもので半年が経ちました。巖先生の報告にもありますが、発足するまで有志が集まり、話し合いを積み重ね、時に話が大きいに盛り上がり、時には「やっぱり駄目かな？」と落ち込んでみたりの繰返しをしながら、先生達の励ましとお力をお借りながら 2011 年 12 月に「家庭教育支援協会」として一歩踏み出しました。活動報告にもあります通り、試行錯誤しながらもそれぞれの分野で確実に 1 つ 1 つ実績を積み重ねております。

そしてこの度、初年度総会を機に「家庭教育支援協会 ニュースレター 創刊号」を発行することが出来ました。これまで力になってくださった多くの皆さまに感謝の意を述べるとともに、今後とも未熟な私共にご支援・ご指導の程よろしくお願い申し上げます。

### かながわコミュニティカレッジ平成 23 年度連携講座 家庭教育支援者のスキルアップのためのミラクルアドバイス

## <家庭教育アドバイザーの皆さんのご活躍の様子>



### 『「家庭」を幸せにする講演・ワークショップ I ーみんなで話し合おう、家庭の問題・家庭教育ー』

